

瞬きの日々。



makana



この世界は どこまで行っても 隅がない

この世界は 歩いても 走っても 端がない

辿りつかないゴールに 途中で立ち止まる

それでも 歩くのは 不安と希望が交互にくるから

この世界は どこまで行っても 自由だ

この世界は 自分次第の希望想像世界

辿りつけないゴールの瞬間が明るいものと願う



手が届く距離 伝わらない言葉

小さく吐く溜息は 大きな不安

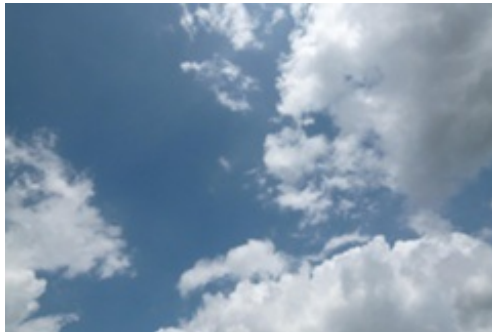
手が届く距離 伝わらない優しさ

笑っている顔の下は寂しさに埋まってる

指が絡む距離 見えない形が欲しくなる

時間と距離と切なさと曖昧な勇気

指が絡む距離 唇をかみ締める切なさ



鼻歌くらい歌えるくらいに回復する頃

あなたはどこかのソラの下で笑ってる

わたしは涙とまってる

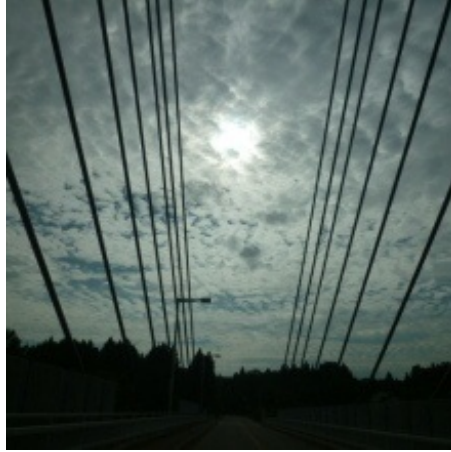
優しい音楽に出会っている頃

あなたは甘い味のする恋人が隣にいる

わたしは笑えてる

いつかのことは思い出になっている

それでも。



風が全部持って行ってくれる

悲しさも不安も怒り

負のもの全部

陽の光が強さをくれる

見えない

未来に

続く道を

歩く勇気を

厚い雲の隙間の下

アスファルトの上にわたしは立っている

今日も明日もこの先もひび割れた人生

わたしは立っている

それでも

明日の上にわたしは立っている。



背中に生える翼を広げる瞬間

鳥籠という狭い世界から飛び出す

羽音を響かせる空の蒼に吸い込まれる

小さな不安を掻き消して

羽が抜け落ちるくらいに飛び続ける

広い世界を夢見て光の筋を頼りに

抱きしめているのは希望だけ



あおのなかで

ゆらゆらと

きらめくひかりが

やさしくて

溶け出す濁りは

やがて

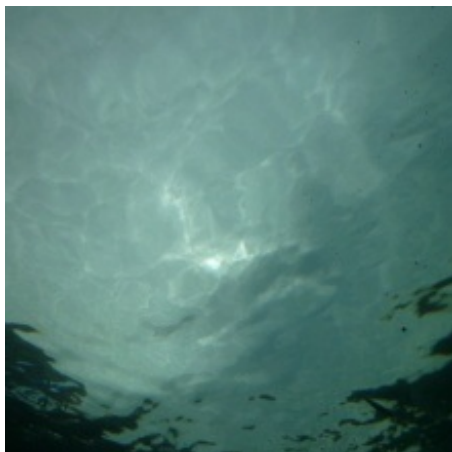
クリアな感情に

変化する

きみは

どこまでも

あおのひと



青の中に
揺らめく

光に

手を伸ばす

水の音

欠片。



なかないで

零れていく粒

震える夜

散るかのうように

ハラハラと

落ちるのは

恋の欠片

消えそうな声を

震えそうな瞳を

全部 ぜんぶ

うまれたのは

恋の欠片

瞬きのたびに

落ちてくる星屑みたいに

揺れる夜



甘くぼやけた世界に溺れていたい。
ただ、君のことだけを考えるだけ。

抱きしめてくれるその腕の中で

何も考えない。

目を瞑って、鼓動を重ねて

ただ甘くぼやけた世界に沈んでいたい。

夢なら醒めなくていいと

絡めている心を嘘にしたいくない

甘くぼやけた世界に

封をする。



堪えきれない気持ちを

ギュッと閉じ込めるために

下唇を噛むのは

零れないようにするための

防御壁

涙が零れないうちに

目を閉じる

そうすればいい夢だけを閉じ込められる

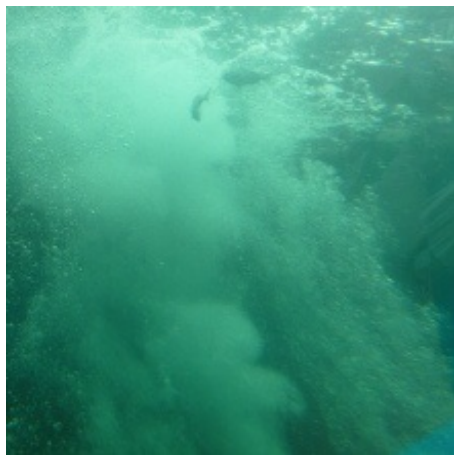
コンクリのつめたさが足の裏から這い上がってくるのを

自分の心のように受け止める

せめての救いは

熱く叩きつける鼓動が

まだやれると叫んでいるからだ



あなたと過ごした この部屋は

どこも かしこも 愛が溢れ落ちていて

足で踏みつけては

潰れていく 愛の重さに

うんざりしてきて

踏みつけた足を洗うために

浴室に行って

洗い流す

排水溝に

流れていく水と一緒に

流されていく 崩れた愛を

冷ややかな目で見ると

どこかで 詰まりはしないかと

深く息を吸いこんで

溜息で 最後は流してしまえばいい



誰かの手を借りる

その優しさが どんなに有難いか

だから素直に 『ありがとう』 と言える

その言霊が伝わって笑みが零れる

-----その瞬間、

重なった気持ちから

『HAPPY』 が生まれて

そうやって繋がっていく

あったかい 幸せなきもちが

ずっと

ずっと

loopしていくといい

キミよりも、ボクのほうが。



キミに会いたくて
点滅している信号のように

ドキドキを重ねて

真っ直ぐな白線の上を

渡った先

溶けそうな暗闇に沈める想い

キミに会いたくて

少し時計の針を早めて待っている

空の星よりも近い距離

キミにもうすぐ会えるのだ

瞼を閉じると寂しくなる夜

絡める指が

隙間から零れる

愛しさが

嘘じゃないとおしえてくれる

愛しい。



満開の桜の中
あなたが

愛しい

手を伸ばして

掴みたくなる

あの光のように

眩しいくらいの

あなたは



君の

その

曖昧な微笑みで

僕の心を狂わして

その投げかけられた微笑は

僕にだけくれたものなのか

それともそれすらも違うのか

君の

その

曖昧な微笑が

僕を虜にしているのだ

君の

その

曖昧な微笑みは

それすらも本当は

笑ってなんていないのかもしれないのに

君の

その

曖昧な微笑みに

今日も僕は狂わされる



丸い水槽の中で優雅に泳ぐ君を

少しでも広い場所へと移してあげたくて

誰も居ない家の中

浴槽に君を放つ

急に広くなりすぎた世界に

戸惑ったりしてはいないか

もしかしたら喜んでいるのではないか

そんなふうに君を見て

また

狭い丸い水槽に戻してあげる

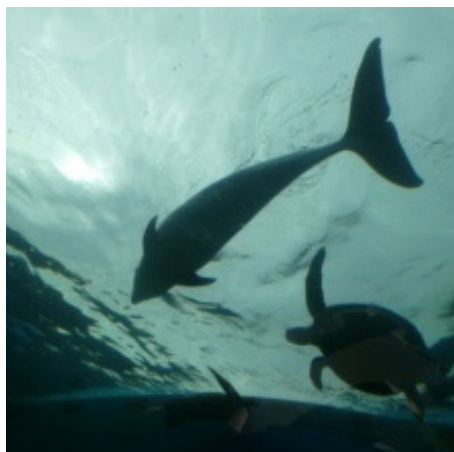
似ているのは 金魚と私

そんなふうに

私は君の心で泳いでる

そう、私は金魚なんじゃないかとおもうのだ

赤く 小さく 君の中で 泳ぐのだ



浴槽に沈む

鼻をつまんで息を止めて

その狭い海に身を沈める

苦しくてすぐに地上にでてくるアタシ

とうてい人魚姫なんかになれないや

人魚姫は泡になったとき

王子様を一番大切に考えていた

綺麗な足をあげるよと

言われたら

綺麗な腕をあげるよと

言われたら

綺麗な身体をあげるよと

言われたら

魔女と契約しちゃうのに

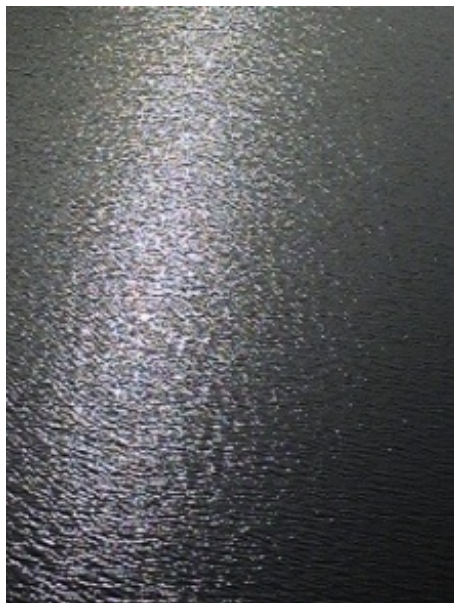
それほどにまでして手に入れたい

王子様がアタシに現れるのか

浴槽の中の恋

アタシは泡になんてなれないやと

浴槽に沈みながらかんがえる



どうしようもないくらい

零れ落ちてく想いは

水溜りになり

川になり

海に流れてく。

君への想いもそれと同じで

溢れて零れてく。

夜の闇に

その気持ちを忍ばせて

わからないように

零れていく想いを消そうとしてみるけれど

流れて

流れて

流されて

私の気持ちは

暗闇の川に流されて。

君への元へとたどり着くことがない。

それでも

隠していても

潜めていても

どうしようもないくらいに

熱く零れ落ちる想いの雫は

やっぱり水溜りになり

川になり

海に流れてく。

どうしようもないくらいの

どうしようもない

アタシのきもちが

今日もまた

零れ落ちてく。



でこぼこでも

おおきくても

ちいさくても

それぞれに

おもいがある

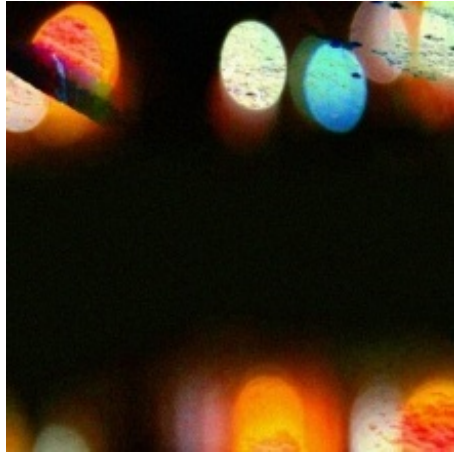
どれかに

おもいが

かさなれば

いし（意志）が

かたくなる



瞬いて

呼吸するように

瞬く瞼

ぱらり

ぱらりと

瞬くたびに

近くなる距離

瞬くときに零れ落ちる雫

睫毛で弾くのは

涙なのか

雨なのか

それとも

恋の欠片なのか

わたしの恋も

瞬くように

自然に

気がついたら始まっている。